

想像的他者との心理的距離の関数としての羞恥感

堤 雅 雄*

Masao TSUTSUMI

The Relationship between Psychological Distance
and the Level of Embarrassment.

問 題 性

人間がすぐれて関係的存在であることを、如実に示す心理現象が羞恥である。

羞恥は他者存在を志向する意識を前提とした、他者の視線に喚起された覚醒状態である。しかしここでいう「他者」の視線は、必ずしも現前する必要はない。むしろ実在の他者の視線に対しては、それを意識しただけで見返すことができなくなる (Argyle & Williams, 1969, 堤, 1985) ほどに、羞恥する者が意識する他者の視線は、実際にはかなり観念性の強い、「見えざるまなざし」である。

主体にとっての、この内化された「まなざす他者」との主観的關係は、羞恥現象を規定する要因として極めて重要である。たとえ一般に羞恥を引き起こしやすい場面 (例えば評価不安の高まりやすい状況) があるとしても、その際意識する対象との関係によって、羞恥の度合はおおいに変わってくる。例えば、家族の前ではたとえ裸になったとしても恥ずかしくはない。また、「旅の恥はかきすて」といわれるように、見知らぬ他人に対していかに無様な格好を曝しても、さほど恥ずかしさを感じる必要はない。我々は、誰に対してもむやみに恥ずかしがるわけではないのである。

近年、欧米での“shyness”研究に触発されて、羞恥に類する対人感情 (shyness, social anxiety など) についての心理学的研究が内外で盛んになってきている。しかしながら、その多くは状況的要因と主体的要因 (特性)、及びそれらの相互作用に関するものであり (Buss, 1980,

Jones et al, 1986), これらの感情の経験主体と、意識される対象としての他者との関係の質についての議論は稀である。もちろん、状況要因の1つとしての他者存在については、その注視の強さの度合に伴う感情的反応の変化についての議論 (Buss, 1980, p.29) などにみられるように、傍らに他者があることの効果について論じられることは珍しくないが、そこではあくまで「他者一般」が論じられるのみで、微妙な自他の関係性の違いにまで言及されることはまず無い。この際の「他者 (others)」とは、ほぼ「自己ならざるもの」総体の謂いである。従って、この意味での他者性が強くなればなるほど他者存在の影響が大きくなると、単純に考えられている節がある。

一方、精神病理学の領域では (といっても、殆ど本邦のみだが)、かねてより対人恐怖症に関して、様々な論者が様々な表現でこの問題が論じられてきている。例えば高橋 (1966) は、対人恐怖症者が困惑するのは「共同的人間関係」という「中間状況」であって、「離散的關係」であるいわゆる他人や、「収斂的關係」である家族等の親密な他者に対しては、むしろのびのびと、ときに傲慢にさえ振舞うといっている。山下 (1977) もまた同様に、対人恐怖症者が最も強く恐怖するのは、学校や職場の友人、知人といった「周囲」のひとつであって、通行人などの「大衆」に対してはより軽く、親しい肉親である「家族」にはほとんど恐怖を感じないことを、データを挙げて示している。さらに笠原は、症者の苦手とする人間関係を「中間的關係」(笠原ら, 1972), あるいは「半知り」(笠原, 1977) と称し、内沼 (1978) もまたこの「中間状況」を取り上げ、「自と他で構成される時・空間的『間』の異和感」として論じている。これらの論者が、対人恐怖症について口を揃えて指摘する他者関係の

* 島根大学教育学部教育心理研究室

質は、羞恥を考える際にも看過すべきでないというだけでなく、むしろ羞恥の本質に関わる重要性を有した問題だと考えられる。

これに関連した議論は、対人恐怖症と通底する質をもつ羞恥論でもみることができる。少し文脈は異なるが、社会学者の作田(1972)は、羞恥の発生基盤を、個人の社会に対する「半所属性」にみている。同じく井上(1977)は、遠慮がはたらく人間関係の中間帯を「セケン」と呼び、近い存在である「ミウチ、ナカマウチ」や、逆に遠い存在である「タニン」や「ヨソのヒト」と区別し、これこそが我々日本人の行動のよりどころとなる準拠集団であるとしたうえで、「はじ」をこの「世間の眼」からまなざされる意識の1つとして論じている。

筆者(1987)もかつて羞恥を論ずるに、これを自他の関わりの中で、自己の存在が自と他の両極に引き裂かれ、二重化する結果としての「自分が自分であることの根底からの揺らぎ」の感覚として述べたが、これもまた上記の諸論と同様の趣旨である。

一般に「他者」(others)と総称される存在にも、自己にとっての意味が大きく異なる2つの水準がある。1つは経験を共有し、感情を共有しうる融合的「他者」存在であり、いま1つは「自己ならざる」、独立した存在としての他者である。人称関係でいえば、前者は1人称で「われわれ」と呼びうるだけでなく、時には「わたし」の一部ともなりうる存在、後者は3人称で「彼(ら)」、場合によっては「それら」と同質の、対象としての他者である。ただしこれは、出会いによっては2人称(あなた)へと転化する可能性を秘めた存在である。

我々の日常経験では、親密な関係の前者に対しては、いかに未熟でやましい自己を曝そうとも、さほど羞恥を感じる必要はない。一方、その存在がわたしにとって殆ど意味を持たぬ「他人」に対してもまた同様である。問題は、このいずれにも定位できぬ、多くの中間的な「他者」である。我々が最も羞恥を感じる対象は、実は、まなざしを介して「わたし」に侵入してくる虞れのある、全くの「他人」ではなく、それでいて未だ「自己ならざる」ところの、関係が曖昧な領域にあるこの第3の他者である。なぜなら、自己は他者との関係において初めて位置付けられるものであるが故に、その他者の存在性が不確定であることは、そのまま自己像の不確定さを意味することになると考えられるからである。

このような問題性に関して、これを直接定量的に検証する試みが最近になってみられるようになった。例えば山際ら(1991)は、竹村(1988)を参考に、他者存在の効果の1つとして「評価懸念」を取り上げ、これと自他

の心理的距離との関数関係を分析している。その結果、両者の関係がこれまで漠然と論じられてきたように、心理的距離が遠くなればなるほど評価懸念が強くなるといった直線的比例関係にあるのではなく、曲線的、逆U字型になることをほぼ確認している(なに故にか彼らは、心理的距離に近い他者と中間に位置する他者の双方に対して最も評価懸念が高まる、と予想していた)。

本研究では、評価懸念を包含するのは間違いないとしても、それ以上に複雑で大きな概念である羞恥について、前述の推論を検証するため、以下の質問紙による実験を計画した。

方 法

被験者 人格心理学概論を受講する島根大学教育学部学生、96名。うち、男子20名、女子76名。年齢は20才から23才で、平均20.4才。なお、このうち女子の1名はデータの一部に欠損あり。

質問紙 被験者に想い浮かべてもらう他者は、山際ら(1991)の結果を踏まえて、心理的距離がおおよそ等間隔と考えられる次のAからEの5水準に限る(彼らのように8水準や10水準では、同じ様な課題を多数回繰り返して被験者に求める事になるため、飽和感や疲労感によるバイアスがかかる恐れが強いと考えられたからである)。

- A. 「最も気心の知れた同性の友人」(山際らの①に同じ)
- B. 「出会えば挨拶をし、多少の会話をする同性の知り合い」(山際らの④に同じ)
- C. 「話をしたことはないが、顔や名前を知っている同性の人」(山際らの⑦にほぼ同じ)
- D. 「名前は知らないが、顔を見たことのある同性の人」(オリジナル、山際らの⑨に対応)
- E. 「顔も名前も知らない、たまたまその場にいた同性の人」(オリジナル、山際らの⑩にほぼ対応)

以上の他者のそれぞれのイメージを、できるだけ具体的に思い浮かべてもらった上で、後述の羞恥場面項目については、(a)「その人と居合わせた時に、あなたはどのくらい恥ずかしいと感じますか?」、自己開示場面項目については、(b)「その人に対して以下のことを話すのに、どのくらい恥ずかしいと感じますか?」と問う。

いずれの項目群においても評定は、非常に恥ずかしい(4)、かなり恥ずかしい(3)、やや恥ずかしい(2)、恥ずかしくない(1)の、単極性の4段階尺度で答えてもらう。

場面を表す質問項目は次の2群よりなる。

- (a) 羞恥場面項目; 山際ら(1991)の評価懸念項目や、

表1 羞恥場面項目

(1) 道路でつまづいてよろけるのを見られてしまった時
(2) 落ちているお金を拾うところを見られてしまった時
(3) 歯に海苔を付けたまま話しているのを見られてしまった時
(4) 食品売り場で試食をしているのを見られてしまった時
(5) 居眠りをしている物を落としたり、ガクッとしたのを見られてしまった時
(6) バーゲン売り場で品物をあさっているのを見られてしまった時
(7) スカートやズボンのファスナーが全開しているのを見られてしまった時
(8) 自分の欠点や弱点を人前でズバリと指摘されてしまった時
(9) たまたま異性と二人でいるところを見られてしまった時
(10) 道路で自転車で乗っていて派手に転んでしまったのを見られてしまった時
(11) たまたま嘘をついたのがバレてしまった時
(12) 店でお釣りが足りないのと店員に文句を言っているのを見られてしまった時
(13) 高級レストランでフォークを落としてしまったのを見られてしまった時
(14) 店のレジで所持金が足りず商品を返すのを見られてしまった時
(15) 店の新装開店で粗品をもらうために並んでいるのを見られてしまった時
(16) 自分が言い張っていたことが間違っているとわかった時
(17) 周りの人が正装している中で自分だけがラフな格好をしているのを見られてしまった時

堤 (1983) の羞恥喚起場面項目を参考に新たに構成した、学生の日常生活において羞恥を喚起させやすい具体的場面を表す16項目 (表1)。

(b) 自己開示場面項目; Davis & Sloan (1974)などを参考にした、自己開示の内容に関する10項目 (表2)。

従って被験者は、5人の他者×26項目の、計130回の評定を行うことになる。なお提示順は、順序効果を相殺するため、5水準の他者間で被験者ごとにランダムとする。

結果と考察

AからEまでの心理的距離の5水準における項目毎の評定平均値を、参考までに算出した項目毎の一元配置の分散分析の結果とともに表3、表4に示す。

羞恥場面; 羞恥場面項目では17項目中14項目と、大半の項目でAの「最も気心の知れた友人」に対する値が最低を示し、残りの3項目(9, 11, 16)ではEの「見知らぬ人」に対する値が低くなっている(表3)。いずれにしても両端のA, Eに比べ、中間のB, C, Dに対する恥ずかしさの度合のほうが高く、予想通り全体として逆U字型の曲線を示している(図1)。項目間の関係をより詳細にみるため、主因子解による因子分析を行ってみ

表2 自己開示場面項目

(1) 自分の悩みを話す時
(2) 自分の将来の夢を話す時
(3) 自分の趣味を話す時
(4) 自分の癖を話す時
(5) 自分の身長、体重、スリーサイズを話す時
(6) 自分の成績を話す時
(7) 自分の自慢を話す時
(8) 自分の家族の欠点を話す時
(9) 他人から自分の欠点について指摘を受けたことを話す時
(10) 恋人とどういう関係か話す時

ると、AからEのいずれにおいても第1因子の負荷が高く(固有値5.3839~7.3055, 寄与率31.7%~43.0%), 共通性はかなり高かったが、Eを除くA, B, C, Dで、第2因子として項目8, 11, 16が抽出された。第1因子が「みっともなさ」や「さもしさ」、つまりは現代青年にとっての「格好悪さ」としての「公的羞恥」であるのに対し、この第2因子はより内面的な、自己の人格的劣等性についての「私的羞恥」(堤, 1983)を意味するものと解される。この第2因子の負荷が高い3項目では、「自らを恥じる」(あえて言えば、内なる普遍的他者に対し恥じる)という色彩が強いため、他の項目に比べ心理的距離による変動が少なく(F値も項目17とともに小さい)、たとえ相手がだれであろうとも羞恥を感じるという傾向があらわれたと思われる。

自己開示場面; 自己開示場面では、いずれの項目においてもAに対する羞恥は低く、AからDまでの変化のパターンは羞恥場面とよく似ているが、Eに対してだけはこれと相違して、B・C・Dと同じ水準を保っている。項目別にみると、1, 5, 10といった、よりプライベートな領域の開示に高い羞恥を示している(表4, 図2)。AからEまでのそれぞれについての因子分析の結果は、やはり第1因子の負荷が高く(固有値2.9685~5.1329, 寄与率29.7%~51.3%), 第2因子らしきものは特に見いだされなかった。

男女差については、羞恥場面項目では5水準全てにおいて有意差はみられなかったが、自己開示場面項目では、A, B, Cの3水準で、女子のほうが男子より高い羞恥を示した。ただし男女のサンプル数の不均衡が大きく、断定するには問題がある。以下は男女を区別せず、込みにして分析を続けていく。

心理的距離; 羞恥場面では17項目、自己開示場面では10項目の合計について、5つの心理的距離による違いをみるため、一元配置の分散分析を行ってみた。結果を表5, 表6に示す。いずれも主効果は有意であり、全体として羞恥感他者との心理的距離に規定されているのが

表3 羞恥場面における項目ごとの評定平均値

心理的距離	A	B	C	D	E	F 値
項目(1)	1.49 (0.63)	2.06 (0.66)	2.53 (0.78)	2.41 (0.75)	2.52 (0.84)	34.36**
(2)	1.68 (0.85)	2.34 (0.88)	2.46 (0.78)	2.56 (0.92)	2.31 (0.89)	14.72**
(3)	2.18 (0.87)	2.81 (0.77)	3.04 (0.81)	3.04 (0.81)	2.84 (0.84)	18.02**
(4)	1.51 (0.65)	2.17 (0.83)	2.35 (0.95)	2.29 (0.85)	1.75 (0.86)	18.67**
(5)	1.55 (0.66)	2.07 (0.76)	2.26 (0.87)	2.28 (0.80)	2.28 (0.87)	14.82**
(6)	1.57 (0.66)	2.10 (0.85)	2.25 (0.95)	2.20 (0.91)	1.66 (0.88)	12.99**
(7)	2.53 (0.92)	3.24 (0.75)	3.38 (0.76)	3.47 (0.70)	3.24 (0.80)	21.31**
(8)	2.19 (0.94)	2.58 (0.79)	2.48 (0.82)	2.53 (0.81)	2.21 (0.86)	4.62**
(9)	1.58 (0.84)	1.86 (0.90)	1.56 (0.77)	1.50 (0.73)	1.15 (0.48)	10.94**
(10)	2.02 (0.71)	2.75 (0.83)	2.92 (0.88)	2.92 (0.79)	2.87 (0.90)	20.68**
(11)	2.70 (1.01)	2.79 (0.86)	2.61 (0.84)	2.50 (0.83)	2.15 (0.84)	7.73**
(12)	1.71 (0.69)	2.20 (0.89)	2.35 (0.93)	2.21 (0.94)	1.83 (0.83)	9.78**
(13)	1.70 (0.77)	2.14 (0.83)	2.32 (0.91)	2.17 (0.84)	2.08 (0.86)	7.27**
(14)	1.94 (0.81)	2.61 (0.90)	2.75 (0.92)	2.59 (0.96)	2.33 (0.95)	11.94**
(15)	1.67 (0.75)	2.30 (0.94)	2.38 (1.00)	2.33 (0.97)	1.71 (0.85)	14.92**
(16)	2.55 (0.89)	2.60 (0.77)	2.61 (0.85)	2.58 (0.88)	2.27 (0.76)	2.79*
(17)	2.06 (0.84)	2.57 (0.89)	2.53 (0.88)	2.53 (0.87)	2.42 (0.96)	5.32**

() 内は標準偏差

表4 自己開示場面における項目ごとの評定平均値

心理的距離	A	B	C	D	E	F 値
項目(1)	1.57 (0.72)	2.23 (0.86)	2.59 (1.04)	2.51 (0.96)	2.54 (0.96)	20.58**
(2)	1.41 (0.70)	1.98 (0.92)	2.18 (1.11)	1.89 (0.97)	2.06 (0.98)	9.48**
(3)	1.06 (0.28)	1.41 (0.72)	1.64 (0.92)	1.52 (0.77)	1.55 (0.77)	9.30**
(4)	1.23 (0.51)	1.63 (0.82)	1.86 (0.92)	1.79 (0.81)	1.80 (0.84)	10.13**
(5)	1.94 (0.94)	2.38 (1.07)	2.58 (1.15)	2.61 (1.08)	2.53 (1.16)	6.33**
(6)	1.50 (0.71)	1.91 (0.80)	2.06 (1.00)	1.97 (0.91)	2.01 (0.84)	6.81**
(7)	1.68 (0.85)	2.10 (0.90)	2.23 (0.97)	2.10 (0.86)	2.10 (0.84)	5.45**
(8)	1.54 (0.75)	2.13 (0.95)	2.34 (0.99)	2.16 (0.89)	2.17 (0.91)	10.90**
(9)	1.52 (0.74)	1.93 (0.84)	2.13 (0.96)	2.03 (0.81)	2.21 (0.87)	9.63**
(10)	1.91 (0.87)	2.46 (1.01)	2.45 (1.09)	2.49 (1.01)	2.59 (1.00)	7.06**

() 内は標準偏差

明らかである。

多重比較を簡便な Ryan の法で行ってみたところ、羞恥場面項目では $A < E < B (=D=C)$ の関係が、名義的有意水準 1% 以下で確かめられた。即ち、中間的関係の他者である C, D, B に対する羞恥が、見知らぬ他者 E や、それとは逆に親密な友人 A に比べ、より高かったわけである。

また自己開示場面では、A とそれ以外との間、及び B と C, B と E の間に名義水準 5% で有意差がみられた。B と D の間、及び D, C, E 相互間には有意差はない。自己の私的な領域について話をしなければならないときには、関係が遠い相手に、より羞恥を感じる事が確か

められた。羞恥場面とは異なって、ここでは見知らぬ他人に対する羞恥が、中間的他者に対するのと同様にかなり高かった。初対面の人と会話するのは、日常生活でも結構経験することだが、そこでは自己開示を機に、見知らぬ人は、もはや関わりのない「他人」ではなくなる。しかし、そうなってもやはりお互いの「間」は計り難く、不確定のままである。E における羞恥反応の高さは、このような見知らぬ他者の、自己開示を契機とした中間的他者への転化によるものと考えられる。

全体的考察

今回は様々な対人関係のなかで、山際ら (1991) にな

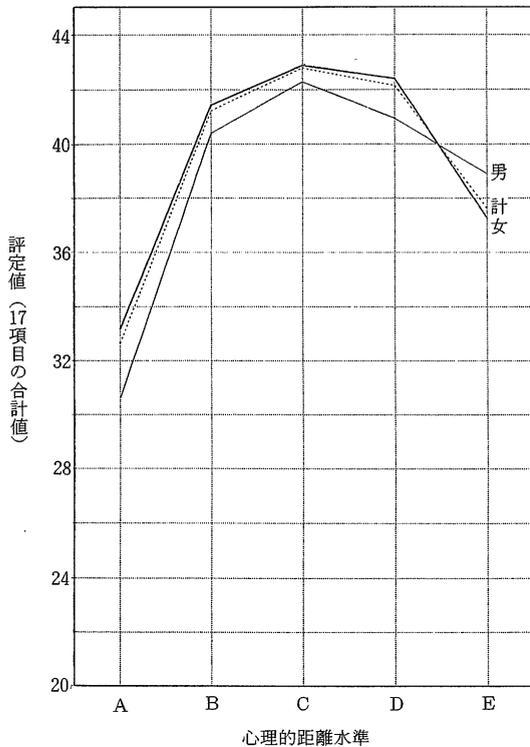


図1 羞恥場面における評定平均値

表5 羞恥場面における心理的距離水準の効果

変動因	自由度	平方和	平均平方	F-値
全 体	478	44329.54		
心理的距離	4	6833.58	1705.646	21.554**
誤 差	474	37506.96	79.129	

らって、恋人や夫婦、親子といったエロスの（融合的）な関係を除き、友人・知人、あるいは他人といった5水準の「他者」との関係において、心理的距離に応じて感じる羞恥の度がどのように変化するかを、質問紙法を用いて実証的に検証してみた。

結果は、これまで精神医学界で対人恐怖症に関してしばしば指摘されてきたと同様に、お互いの関係が未定位な、心理的距離上では中間的な他者に対するほうが、気心の知れた知人や、逆に面識のない他人といった、関係の粗密の両端に比べ、より強い羞恥を感じるという傾向（関数関係でいえば逆U字形の曲線関係）が確認された。この傾向は公的（対他的）羞恥場面でもより顕著で、私的（対自的）羞恥に関してはそれほどでもないという、興味深い違いも示した。

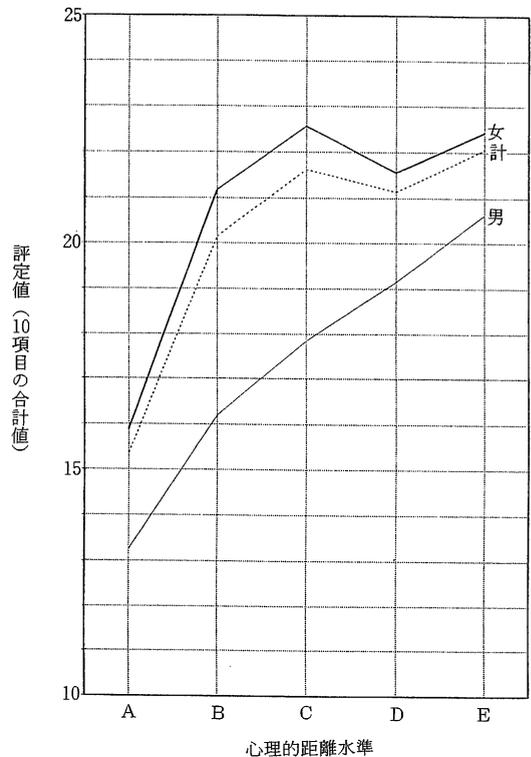


図2 自己開示場面における評定平均値

表6 自己開示場面における心理的距離水準の効果

変動因	自由度	平方和	平均平方	F-値
全 体	478	21668.96		
心理的距離	4	2831.88	707.970	17.8147**
誤 差	474	18837.08	39.741	

なお、自己開示場面において感じる羞恥に関しては、見知らぬ他人に対しても高い反応を示した。これは、自己開示という具体的相互作用を契機に、お互いの存在が無縁なものから中間的な関係に転化することによるものと考えられる。

なぜ中間的他者に、特に強い羞恥を感じるのか。

最初にも述べたが、羞恥は他者の存在に対するものである。もちろん、ひとり顔を赤らめるということもあるが、それもまた、自我の分裂、即ちもうひとりの自分という「他者」からのまなざしを意識するが故である。これほどまでに意識される他者でありながら、我々はその姿を、その眼を直視することはできない。我々に羞恥を感じせしめる他者とは、このように輪郭が曖昧で、その視線の暖かさ、あるいは冷たさを確認することが困難な

存在、即ちここでいう中間的他者である。

羞恥を評価不安としてのみとらえる考え方もある。アメリカの shyness 研究ではこの傾向が顕著である。しかしそれでは、関係が遠くなればなるほど不安が高まることになってもおかしくはない。しかし実験の結果は、羞恥はそれほど単純なものではないことを教えている。

今回の結果はあくまで紙上の思考実験によって得られたものであり、その意味での制約から逃れることはできない。しかしもともと羞恥とは、生理的反応を伴う直接的反応であるとはいえ、観念的、主観的要素を大きく含み、これらの結果も我々の日常の実体験をかなりのところまで反映していると考えてさしつかえない。ただし実際の人間関係の位相は、ここで取り扱った以上に微妙で複雑であり、今後検討すべき課題は多い。

参 考 文 献

- Argyle, M. & Williams, M., 1969, Observer or observed? — a reversible perspective in person perception. *Sociometry*, 32, 396-412.
- Buss, A. H., 1980, *Self-consciousness and social anxiety*, W. H. Freeman and company, S. F.
- Davis, J. & Sloan M. L., 1974, The basis of interviewee matching of interviewer self-disclosure. *British Journal of Social & Clinical Psychology*, 13, 359-367.
- 井上忠司 1977 「世間体」の構造：社会心理史への試み，日本放送出版協会。
- Jones, W. H., Cheek, J. M., & Briggs, S. R., 1986, *Shyness—perspective on research and treatment*. Plenum, N. Y.
- 笠原 嘉，藤縄 昭，関口英男，松本雅彦 1972 正視恐怖・体臭恐怖，医学書院。
- 笠原 嘉 1977 青年期：精神病理学から，中央公論社。
- 作田啓一 1972 価値の社会学，岩波書店。
- 高橋 徹 1966 対人恐怖の精神病理，精神経誌，68，31。
- 竹村研一 1988 日本人における「スモーキン・クリーン」のライフスタイル，たばこ総合研究センター編，たばこを考える2，平凡社（山際ら，1991による）
- 堤 雅雄 1983 羞恥論への予備的考察，島根大学教育学部紀要（人文・社会科学篇），17，1-7。
- 堤 雅雄 1985 見ることと見られること：異性の接近事態における一実験，島根大学教育学部紀要（人文・社会科学篇），19，107-112。
- 堤 雅雄 1987 人格の二重性の諸相：羞恥心性と対人不安心性を中心として，島根大学教育学部紀要（人文・社会科学篇），21，21-27。
- 内沼幸雄 1978 対人恐怖の人間学：恥・罪・罪悪の彼岸，弘文堂。
- 山際勇一郎，堀 洋道 1991 他者との心理的距離と評価懸念の関係，教育相談研究，29，13-17。
- 山下 格 1977 対人恐怖，金原出版。